

Title	経済史研究に就いて (二)
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.8 (1921. 8) ,p.1173(111)- 1184(122)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210801-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

るなり。實際は Böhm-Bawerk は資本に關する二つの異りたる概念を用ふるの普通の誤りに陥れるなり。而して最初の攻撃に於て支持す可らざる地位に在るを發見せられたるなり。『Fetter, "Recent Discussion of the Capital, Concept?" quar. Jour. of Eco., Vol. XV, p. 8.)

「同種同量」と云ふ補充語の必要なる所以を論述せし Böhm-Bawerk は更に鋒先を轉じて「自身の辯護よりして尊敬する反對者の其れに對する攻撃」に移れり。語勢を強めて言ふ「Clark 教授は、前に引用せし比較は認め難き形式なることを恐らく念頭に有せらる可しとは余が正に述べし所なり。(然れども)余は茲に何等斷言するを得ざるなり。何となれば Clark 教授は此問題に關して正確なる説明を避けて二重の解釋の認めらるゝ漠然たる言葉——a sum of wealth (富の額) 或は an amount of wealth (富の高)と言て彼は Clark が二重の解釋の許さるゝ漠然たる意義を有する用語を探りしを非難し斯る批判は亦 Clark の資本概念の全體に對しても加ふるを得べしと論せり。(未完)

經濟史研究に就いて (二)

野村兼太郎

四

「然し斯くの如く休戦したと云つてもそれは確にそれに就いて各自の意見を求めて居る學生に、それ等を明白に説明することを吾人の誰かに止むべきものではない。而て殊にある者の地位を、新大陸に於いて新しい義務を引受けるやうにする機會は極めて稀であるから、此の場合には明に例外に入るべきものであらう。又次ぎのやうなことを記憶して置いて貰ひたい。即ち余

ふ——を選択して使用し居ればなり。之は財の額と同時に價値の額も意味すべし。然れども余は、之等の事情の下に於て若しも Clark 教授が彼の意味する所を正確に限定せざるを得ざるならば、彼は正しく余が斷定する所を斷定するか或は確かに誤れる或物を斷定するか其何れかを爲さざる可らざるべしと云ふことは、確に主張し得ると思ふなり。何となれば彼は彼の amount of wealth によりて財の高を意味するか、或は價値の高 (an amount of value) を意味するかならざる可らざればなり。而して前の場合に於ては、彼が現在の財の優越を示さんとするならば、彼は必ず其比較の半に於て同種同量の財を參考せざる可らざるなり。然るに後の場合に於ては或一定の現在の價値が等しき大きさの將來の價値の高より大なりと云ふ斷定は正に批判せし自家備着を含むものなり。(Clark, p. 100) 斯くし

は余自身の個人的判斷を述べるに過ぎない。余と全然違つた意見を有たれる多くの有能の士の居られることも十分よく知つて居る。余の云ふところを聞き、直ちに去つて他の方面を研究する者の存することは十分あり得べきことである。而して其の人々はさうするのがいゝのである。尙ほ余に提議せんとして來る有能な且眞に用意せる心の圓熟せる學生に告ぐべきことは略々次ぎの如きものである。

「云ふ迄もなく諸君はすでに經濟學にある注意を拂つて居る。學説の重なる輪廓、例へばジョン・スチュアート・ミルに依つて述べられたやうなものも熟知して居る。又アダム・スミスからミル迄の經濟史及びミル時代以後の發展の主要を幾らか知つて居る。若しも此の準備も實際未だ得て居ないのなら余はそれを得るやうに忠告する。其の研究は諸君に後に便利であるやうな

見地を齎すであらう。而して現代思想の興味ある部分に諸君を導くだらう。且つ又大學に於いて今や教課は整つて居るから、此の初步の研究をなすことは困難でないだらう。六ヶ月しつかりと勉強すれば多分十分であらう。余は諸君がすでに是等の知識を有して居ると余に告げると假定し得よう。諸君は社會の經濟生活に關係させられてゐる。少しは諸君自身の獨立せる仕事をなすことを好むだらう。而して如何なる方向に於いて諸君の努力が最も効果が多いかを求める。余は理論的鬭議の範圍に於ける状態は非常に有望に見えること云ふことは出来ない。何年も分配論の問題に關する烈しい論争が行はれて居た。而して經濟學者は、第一流の經濟學者さへ、中々一致しないやうに思はれた。ウォーカー總長に依れば賃銀は資本家、企業家、地主及び労働者の共同生産から生じ、労働者に屬する餘利所

得である。他の三者の所得は制限されて居ると。十五年間彼は種々なる書に於いて是を主張して居た。亞米利加及び大不列顛の大學の半に反響を興へた。而も尙ほ余は彼に同意する他の優秀なる現存の經濟學者を發見し得るか如何か疑ふ者である。更に利潤に就いて見よ。利潤を支配の爲めの賃銀として、又危険の報酬として、更に賃料のそれと同じやうな法則に依つて支配される所得の一種として説明する等それれ同じやうに相當の學者を發見するだらう。余は亞米利加の若い經濟學者が大ざつぱりに新しい塊太利學派の「主觀的價值論」を受け入れて居ることを注意する。而して彼等はすべての問題の解決をその中に發見して居ると思ふ。然しポーナア博士——彼は塊太利學者を英語國の研究者の注意に導いた他の何人よりも多くのことをなした

に與へたものは「價値の原因の説明よりも寧ろその定義」である。彼等の原則は「現代諸國に於いて吾人に應ずるやうに分配の諸問題」に適應されなければならぬ。而して此の事業に於いて彼等の亞米利加の弟子達が新語法に依つて甚だしく助けられて居ることは明瞭でない。且つ又最初の困難が尙ほ未だ絶えず生じて居ること——經濟學者は互に了解することが出来な

が同じく著名なる學者Dに、注意して「余はD氏が否定して居るにも拘らず、氏は利潤と云ふ言葉を余の解するが如く使用して居ることを指摘するに此の困難をも感じない」と云つて居る。又ある者が偶然『毎季雜誌』のある號を手にとつて見ると、『總長Z氏の余に對する主なる批評の基礎である誤謬は根本的であり、思ひもよらぬものである。』と云ふ記事に目が觸れるだらう。是等の有能なる人々がなした以上に十分學說の解釋に成功するだらうと、余の質問者に云はなければならぬと、想像する理由を見ない。勿論諸君が抽象的理論に特別の才能を有して居ると信すべき理由あり、且つ又經濟學說の方に強く惹きつけられるなら、其の方面に諸君の思索を向けることに相當の喜を發見するだらう。余は諸君が價值ある結果に到達することは殆どあるまいと思ふけれども、必ず到達しないと極

めて強い確信を以つて豫言するまで苦にしては居ない。余が心を傾けるより遙かに遠いものである。然し若しも諸君が斯くの如く強い愛著を有さないならば、余は諸君が經濟史に手を著けることの適當であることを考へるやうに勸告する。其處は殆ど未墾地である。數多の材料がある。又よし諸君が如何なる甚だ廣大な結論に到著しないとしても、諸君の發見した事實はそれだけで知識の積極的增加であるだらう。ロツツエも云ふ如く、『事實を知ると云ふことはすべてのことではなくして、大部分のことである。而してある者が更に何ものかを欲求するからと云つて此のことを軽く考へるのは半が屢々全體よりよいと云ふことを了解しない者にのみ適することである』(“Surveys” p. 9-11)

(註1) Quarterly Journal of Economics, iii. p. 26 [原註]
 (註1) Ibid. p. 31. [原註]
 (註1) Ibid. p. 30. [原註]

觀的には吾人の知識であり、客觀的には過去の事實である。あらゆる歴史の意義は此の二つの前提より生ずる。余は嘗つて他の場所に於いて歴史の必要條件として左の四つを挙げたことがある。即ち(一)時間的に經過したことを、(二)事實に存在したこと、(三)個別的に記録されること(四)文化價值に關係あること、の四つである。是等の條件に就いてこゝに一々詳論して居る餘裕がない。唯最も多くの異論が起り得るし、又文化科學の方法論と最も密接なる關係がある第四の條件、——歴史は文化價值に關係(Deziehen)あることが必要であると云ふ點に就いて少しく述べて置く。

ウァンデルバンドの有名なゲーテの例證を擧げるまでもなく、單なる事實の記録は歴史的記録ではない。①それは前に述べたやうに歴史が主觀的に見て吾人の知識であると云ふのはある事

(註四) Ibid. vi. p. 116 [原註]

五

こゝに經濟史そのものに關する議論に入るに先立つて特に論じなければならぬことがある。後にアシユレー教授が擧げて居る注意を述べる前に簡単に歴史とは何ぞやと云ふ問題を明白にして置く必要がある。此の問題は極めて重大な且つ困難な問題ではあるが、こゝには直ちに余自身の考ふるところを述べようと思ふ。斯くの如き議論は恰も經濟理論に於けるそれのやうにアシユレー教授から無用の論であると云ふ非難を受けるかも知れない。然し經濟史も一つの歴史である以上、歴史の意義を明確にするこゝが經濟史研究に必要なことは云ふまでもないことであらう。

歴史が嘗つて起つた事實の記録なることは敢て論ずるまでもないことである。即ち歴史は生

實の雜然たる記憶を意味するのではない。單なる記憶の集合は知識を形成し得ない。歴史が眞性の知識であるならば、矢張り何等かの規準が存しなければならぬ。それが存しない限り、それを綜合統一することを得ず、原理的に選擇されず、如何なる選擇目的にも適ふことが出来ない。換言すれば歴史的認識の對象となり得ない。

吾人がある個々の事實に關心し興味を有すると云ふことは、其の事實にある個性を認めるからである。例へば吾人が甲と云ふ者の傳記に興味を有し關心することは、甲の個性を認識し、是を吾人の人格に反應せしむることである。此の點から見て歴史的認識は同情であると云ふ考へ方を是認することが出来る。故に歴史家は鋭敏なる直感力を必要とすること、恰も藝術家と同様である。單なる事實の集合が歴史ではなく

して、ある根本的基準に基く事實の統一ある綜合が歴史であり、斯くの如き綜合は唯單に材料の併列を以つて得られるものではなく、それ等の材料の個性を十分に理解する洞察に依つてのみ到達することが出来る。此の意味に於いて歴史は一種の藝術である。最もよき歴史は最もよき藝術と多くの一致點を有する。歴史を描くには多くの想像力を必要とする。現實在の個性を直觀的想像に依つて形成する點に於いて歴史と藝術とは全然一致する。科學としての歴史は直觀を止揚して概念の形式に變じ、して是に對して個別性を保護せんとするものである。勿論歴史と藝術とは他の方面、例へば時間的經過を考へる時には甚だ相違して居る、此の點に於いて歴史は時間的實在の反應である。又歴史は其の實在を成立する多くの客觀中から何れが其の實在を説明するに本質的であるかを熟知しなければ

値に關係させて選擇しないならば何等の統一も得られないだらう。然し歴史は價值に關係させるのであつて、價值判斷(Werturteil)を下すものではない。ウツンデルバンドが審美的價值、倫理的價值、理論的價值、並びに「聖なるもの」に對する宗教的價值を認めたのは最も要を得たものであらう。是等の價值がそれぞれの對立、眞偽、美醜、善惡、聖、非聖等に就いて、客觀的事象を評價することは歴史にとつて不必要である。此の點に於いても亦歴史は藝術と一致點を發見する。歴史に於いて善は善としてそのまゝに、惡は惡としてそのまゝに記さるべきである。例へばこゝに經濟的事實があるとする。それは勿論經濟的價值に關係あるが故に經濟史中に取り入れらるべきものである。又其の事實が如何に社會に影響したか、如何なる結果を生じたかは十分歴史の攻究すべき範圍であり、其の範圍に於

ばならない。そこで歴史はあるアプリアリ——文化價值に關係させることに依つて、其の助かりてのみ實在的生起の異質的連續を概念的に支配し得るのである。故に歴史は其の理解する點に於いて直觀的想像に基いて形成されるとしても、其の範圍、質料等を決定するものは直觀的部分と關係なく、従つて藝術とは全く別個のものである。尙ほ是等の點に就いて論すべきことは甚だ多いが、リッカートの「文化科學と自然科學」(Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft)を参照されたい。細い點を除いては大體に於いて同氏の議論に従ふものである。

以上の論述に依つて極めて概略ではあるが、何が故に歴史は文化價值に關係あるものたるを要するかと云ふことを明かにした積りである。即ち多種多様の社會現象——あらゆる客觀から直觀的洞察力を以つて理解する對象を一つの價値に如何なる微細の點と雖も、苟も價値關係があるならば看過してはならない。考證家の仕事がこの點を離れる時無用煩雜の道樂となり、此の範圍内に於いては有用不可缺の事業となるのである。然し其の事象は斯くの如き結果を生じたる故に善である。是等の弊害を生じたる故に惡であると價值判斷を下すのは歴史でなくして史論である。況んや甲が此の制度は斯の如き弊害があると論じて居るけれども、それは誤謬である等と云ふ議論をするのは歴史ではない。唯斯くの如き事實は歴史的事實であるか如何かに就いて、前述した四つの條件に照合することを必要とする許りである。然し判斷と云ふ言葉の意味を通俗的に一般的に解釋する爲めに時として誤解を生ずる恐がある。即ちあることが實際生起したことであるか如何かを歴史で問題にする時眞偽の判斷を下すものではないのか。此の

意味に於いて歴史は矢張り價值判斷をするのではなからうか。然しそれは嚴密な意味に於いて價值判斷を下すとは云へない。何故ならば若しそのものが實際に生起したことでないならば歴史的事實でなく少しも歴史に關係するところないからである。少くとも歴史の關係するところは上述の四つの條件を充足するものでなければならぬ。斯くの如き事實の眞偽の判定は歴史そのもの、關與するところでなく、單に歴史的材料の研究方法に關する問題である。恰も化學の如き自然科学に於いてある水素が確に眞の水素であるか如何かを試みる際の眞偽であるに過ぎない。云ふ迄もなく斯くの如き材料の眞偽は最も重要なものであるには違ひないが、この問題となすべき部分ではない。(3)

以上簡單なる論述に依つて大體第四の條件及び是と價值判斷との區別を述べた。尙ほ是が文

化科學の方法論との關係は更にアシユレー教授の經濟史に關する意見を紹介したる後に論ずることとする。然し未だ歴史の意義に關して十分に論及した譯ではない。殊に歴史的理解の意義、及び歴史的時間の意義等に就いて多く論ずべきものがある。歴史的時間 (historischen Zeit) が唯漠然たる時間的經過を指すものでなく、ある場所に於ける一定の時間を意味しなければならぬ。(4) 然しこゝに是等のことに就いて詳論しなくとも、大體上に述べたところに依つて歴史の本質は理解し得ると思ふ。而して經濟史も亦斯くの如き意味に於ける歴史の一つでなければならぬ。

(註一) 拙著「改版經濟的文化と哲學」二八三頁—一八七頁及び三一八頁參照、

(註二) Windelband: *—Geschicht und Naturwissenschaft.*

(前掲拙著一八六頁參照) (註三) 余は斯くの如く歴史を解釋せんと欲する者である。

が、勿論多くの異論があると思ふ。本誌第十五卷第二號に瀧本誠一博士の勞作「日本經濟史」を此の見地より批評して次ぎのやうに述べた。「是等各項はそれぞれ獨立の論文であつて、經濟史そのものよりも寧ろ經濟史論の方が其の大部分を占めて居る。ある點に於いては福田博士の日本經濟史論以上に史論に多くの頁を費されて居る。此點から見ても經濟史の題は不當でないだらうか。然し乍ら斯くの如きは博士が本書に用ひた研究方法のある解釋から生じた必然の結果である。…然るに其の結果たる本書は事實の敘述よりも其存在に對する評價の方が多くなつたのである。然し乍ら歴史は價值判斷ではない。ある事柄を評價するの價值に關係 (Beziehung) をせるのとは區別しなければならぬ。歴史には後者が必要であるが、前者は無用である。」此の考は今でも正當であると信じて居る。然るに言葉が簡單であつた爲めか多くの誤解(?)を生じたやうである。瀧本博士は本誌四月號に「歴史と歴史家」なる論文を寄稿され、暗に余の批評に答へられ、歴史の意義に就いて懇切なる教を與へられた。常に後進誘導の勞を惜まぬ博士に對して厚く感謝せざるを得ない。然し乍ら遺憾ながら博士の所論に服して余の批評を撤回することは出来ない。余が徒に漫評を加へたものでないことを明かにする爲めに、先づ今一應同書を檢して見よう。例へば第一章封建制度に於いて如何に多くの頁

を封建制度是非論に費されたるか。第三章土地制度に於いての小農大農の利害問題、第八章道路交通政策に於いての政策論。一々枚舉するに遑のない位多くの議論がなされてある。煩はしくはあるが一例を擧げると「小農大農の利害問題は既に本論の初めに論じたるが如く學者間に未決の問題であつて、今日の所では何れの主張も一得一失にしてその優劣は明確に斷言することは出来ないのである、然れども近世の農學者にして純乎たる、經濟的利害より之を打算する者は概して大農法を利なりとなし Large Holding にあらざれば近世的の經營法即ち新式の改良したる諸機械を應用して充分の利益を收むること能はずと云ふの說を主張するのであつて、云々」(同書一〇八頁以下) 吾人は經濟史を繕いて計らずも經濟原論、政策の知識を享くる利益に浴する。勿論三七八頁の大冊子時には斯くの如き議論もあるであらう。然し若し同書に如何に外國學者の引例多きかを見れば少くとも議論がその主要なる部分を占めて居ることが解るだらう。ピヤーソン、アンエレー、メートランド、メーン、マカラフ、ジエンクス、イングラム、ゾンバルト、コイトゲン等は兎に角比較經濟史として許されるかも知れないが、アダム・スミス、ユースチ、ジェボンズ、ヒューム、プロゼロー等が無敵に引用されて居る。恐く以上列記した者は博士の擧げられた半に足らないであらう。若し眞に徳川時代の經

濟史的事實を研究するならば四百頁に足らざる本書に於いて斯くの如く多くの比較論が許されるだらうか。更に本書が徳川時代三百年の時間的経過を殆ど顧慮せずして議論して居る點から見ても歴史と云ふより史論とは云へないだらうか。例へば九九頁以下の長子相續と土地分配との關係に關する議論の如き其の一つである。是以上引證する必要はあるまいと思ふから略する。以上の理由から余は同書に對して上記の批評をなしたものであるが、更に博士の「歴史と歴史家」なる論文を讀むと、此の點は略々承認されて居るやうでもある。以下少しく同論文を批評して博士の厚意に酬いやう。

先づ博士の述べんとする要點と思はれるところを列記して置く。

「意見を用ひず議論を挟まず批評を加へず、又断定を下さなかつたならば、歴史その物は断じて成立することは出来ないのである。歴史は單純なる Annals にあらず、Chronicles にあらず、又 Event-Catalogue にあらず、Factology にあらず、ことば明瞭である、前既に述べたる如く如何に精確に蒐集する事も事實ソレ自體は歴史にあらず、出來事の記述は歴史の資料であつて、歴史そのものではないのである、譬へば植木屋の庭に聚置しある木石は如何に立派であり、貴重であつても之を目して庭園とは稱すべからず、大工の精屋に堆積しある材木は如

何に良材であり如何に名木であつても、之を家屋とは云ふ可らざるが如く、歴史的事實の陳列のみでは正當の意味に於ける歴史とは云へないのである。」(同誌九二頁)

「有意無意に虚言を以て充たされたる古今の事實に對し意見なく議論なく批判なく又断定なくば歴史家は如何にして史料を取扱ふべきか、ソレな事が可能であるかないかは三尺の童子と雖も猶能く了解する所ならん。(同誌九三頁)

先づ以上二個所の論述せらるゝところを見るに、多少の疑問が生ずる、博士は屢々「意見なく、議論なく批判なく、又断定なく」と云ふ句を繰返さるゝが、「意見、議論、批判、断定」とは何を意味されるのか。學者の言語を用ひるには周到の用意が必要である。是等の語は果して價值に關係させることを意味するのか。それとも價值判斷を意味するのか。後の一句より判すれば明かに一の價值判斷である。史料の眞偽を判定するに價值判斷の必要なることは三尺の童子と共に了解し得るところである。然し博士も云ふが如く「出來事の記述は歴史の資料であつて、歴史そのものではないのである。」史料に價值判斷が必要である云ふ議論から一躍して歴史は價值判斷である云ふ結論に到達し得ないことは本文に述べた如くである。博士は是等兩者を混淆されて居るやうである。

次に植木屋の庭にある聚置された木石が庭でなく、歴史は單なる史料の蒐集でないことも事實である。然し庭園の價值判斷をすることは庭園を構成するのとは違はなければならぬ。博士の言葉に従へばある庭園を作るのに意見を用ひ議論を挟み批評を加へ断定を下すことは必要であるが、作られた庭園に對して意見を用ひ議論を挟み批評を加へ断定を下すのは歴史の任務ではない。庭園と歴史との比較は勿論妥當ではないが、斯くの如く區別することに依つて歴史と學史と文化科學とを區別することが出来るのである。博士も「日本經濟史」に於いて「一體古今の學者の思想の發達變遷を秩序的に論評せんとするに當り、其思想の沿革と史實即ち歴史上の事實とは固より判然明確に區別を立てざる可らざることとは勿論の事であつて夫の Blandy や Nys などの經濟學史の如く此二つのものを錯雜混同するは甚だ非學問的である」と云はねばならぬ。(同書三三八頁)と云はれて居る。然らば何を規準として博士は「一を經濟史とし、他を經濟學史とせらるゝか。即ち過去に於ける經濟的價值判斷を下せる學者の思想を蒐集せるものを以つて經濟學史となすべきではなからうか。

更に博士の論ずるところを見よう。「著者の Criticism の多く、Discussions の多きは史論であつて、其の少なきは歴史であると云はゞ、ソレは程度の論であつて、歴史と史

論は叙述と議論との割合を標準として專斷的に決定するの外なかるべきも、其の實歴史の外に史論なく、史論の外に歴史はないのである、例へば福田博士の日本經濟史論は史論の名あつても實は立派なる日本經濟史である、著者の任意に命じたる名稱に拘泥して歴史であるかないかを判斷せんとするは女虎は女である、桃太郎は男であると早合點するの類であつてソレヨリ危険の断定である」と云はねばならぬ。(九五頁—九六頁)

此の一節も頗る曖昧な論法である。歴史は叙述、史論は議論と簡單に定めて居る點は暫く措くも、「歴史の外に史論なく、史論の外に歴史はない」の一句に如何に解釋すべきだらうか。歴史即史論とも取れるし、歴史を離れて史論なしの意にもされる。前者の意とすれば博士が同じ頁で「歴史に著者の意見あり議論あり、批判あり又断定あるは其の之れあるが爲めに歴史の體面を傷け云々」の句と矛盾するように思はれる。歴史と史論と別個に考へて始めて史論が歴史を云々すると云ひ得る。又後者の意とすれば歴史を離れて史論はないが、「論を離れた歴史はあり得る。斯くの如きは要するに言語の用法に周到嚴密を欠いた爲ではあるまいか。又福田博士の著作を引用されたのは恐らく余が批評中に比較した爲めであらう。博士の著が歴史であるか史論であるかは別問題として、著者が任意に命じたる名稱に拘泥して是を史論と云つたのでな

いことは勿論であるが、博士の例に示されたやうな工合に、恐らく女虎(女寅?)は俳優、桃太郎は藝妓の名の積りなのであらうと推測する。勝手に史論を歴史と名付け歴史を史論と云つて差聞えないであらうか。太陽を月と呼び、月を太陽と云つたなら三尺の童子と雖も不服なきを得ないだらう。

最後に余は博士と共に歴史は「議論もせねばならぬ、批判もせねばならぬ、推断もせねばならず、想像もせねばならぬ、計算もせねばならぬ、比較もせねばならぬ、解剖もせねばならぬ、社会の生活状態に関するアラユル事を考案するに缺く可らざる一切の手段を竭くして其の生々たる真相を露がざる可らざるのである。」(同誌九八頁)唯余は本文に於いて述べたるが如き立場に於いて同意するのである。常識判断の曖昧な言語を使用することとは學者として絶対に避くべきことである。

次に余の批評を評された間崎万里氏に對して一言しなければならぬ。然し餘りに紙数を過ぎたから簡単に述べて置く。同氏は氏が「大正時代の好著述學界の誇り」と感じて居る瀧本博士の著作「日本經濟史」に對する紹介の文章中に「と述へ、前掲の余の批評の一部を掲げ、次で竹越氏の日本經濟史を評し、「もし本書を以て近世史學發達以前の著述であるとするならば、瀧本博士の著述に對しての批評は又近世史學以前の歴史評とい

ふべきであらう」と非難されてゐる。「三田評論」第二百八十四號)斯くの如き攻撃の起因は恐らく間崎氏が價值關係及び價值判断の意義を明かにされなかつた爲めであらう。此の點を十分闡明しなかつたことに就いては勿論余の罪である。然し若し氏にして近世史學少くとも最近西南獨逸學派の歴史哲學に關する了解があつたなら或ひは斯くの如き漫評を加へることはなかつたらうと思ふ。素より淺學不才の余であるから尙ほ多くの點に於いて足らざるところが少くないだらう。無理解な非學問的の攻撃罵倒でなく、論理的根據を有する批評を加へられれば余にとつて最も幸福である。

以上先輩兩氏に對して多くの過言をなしたる點に就いては幾重にも寛容を乞ふと共に、貴重の本紙に於いて多くの頁を費したことを讀者諸氏に謝する。

(註三) Georg Simmel: Das Problem der historischen Zeit. 1916.

(未完)

シヨオを中心として觀たるフェビヤン社會主義運動 (二)

町田義一郎

そこで Wilson 夫人一派の會員の離脱を避ける爲め一八八七年二月協會内に Fabian Parliamentary League が設けられ之に加名すると否とは各自の自由とした。

Fabian Parliamentary League は、社會主義の實現は最も迅速且つ最も確實に、民衆が既に有する政治的權力を利用する事に因つて行はれると信ずる社會主義者から成る。

獨逸帝國議會、北米合衆國の立法部並に佛蘭西議會に於ける社會黨の發達は、英國の議會に於て社會黨の可能な事を證するのみならず、我

國內に於て社會主義思想の大きな影響を公の事柄に對して及ぼす任務に英國社會主義者が大いに従う様に命じて居るのである。

此 League は社會主義思想に系統を立て、而してそれを議會自治團體その他の代表團體に影響させやうと努力する。講演及び出版に依つて時事の政治問題を論究し、諸政策の終局の傾向並に其直接の效果に説き及ぼし、而してそれが社會主義の理想に傾けるか遠ざかれるかに依つて社會改良の爲め提起された諸政策の爲め盡力し、或は之に反對する。此 League は有ゆる總選舉並に地方選舉に活動せんとする。議會に於て社會黨を組織するに至るまでは社會主義に最も接近せる候補者を援助するに止める。何れの政黨とも絶対に合併せず、政黨の目的の爲め利用される事を避け、候補者の性格經歷並に選舉區民に對する誓約に依つて盡力をする。都市、